

役員の新しい任期がスタートし、
会長、副会長、常務理事が
新体制になりました。

令和3年度6月23日の理事会において本会役員が選出されました。今号では小畑新会長に就任にあたっての思いをお伺いしました。

つながりをいかして、
だれもが尊厳をもって
いけることができる
社会をつくる



基本理念
(ビジョン)

「ひとりひとりが
豊かさや生きがいを
感じる」ことのできる社会を

就任インタビュー
小畑英明新会長が語る



住友電気工業株式会社常務取締役を経て日新電機取締役社長、会長等を歴任。現在、特別顧問。京都経営者協会会長、京都府教育委員なども務める。令和3年6月23日から本会会長に就任。

おばた ひであき
小畑 英明

京都府社協が第5次中期計画で掲げる理念「つながりをいかして、だれもが尊厳をもっていきることができる社会をつくる」は、企業経営と社会福祉とのアプローチの違いはありますが、私が目指す「ひとりひとりが豊かさや生きがいを感じる社会」と共通していると感じています。

——今の社会の動きをどのようにとらえておられるでしょうか？

コロナ禍により少子高齢化はさらに加速する一方、新たにデジタル化が進みました。低成長の中のデジタル社会では、生活の格差がますます広がってくると思います。例えば、ワクチン接種においても、デジタル化の中で予約ができる、できないといったことで命の格差が起きている。格差が広がると苦しんだり困ったりする人が増えます。その格差が広がらないように努力していくことが、これからの社会の中で重要なことになっていくと考えています。

今、社協では、生活の苦しさを少しでも埋めるべく生活福祉資金の特例貸付に取り組んでいます。こういうときにこそ、社会福祉の役割がますます大きくなると思っています。

——新たな会長としてバトンを受け継ぎましたが、今の思いを教えてください。

これまでの企業経営という立場から社会福祉という大きな海の中真ん中に立つことになり、気合を入れてやっていかなければならないと思っています。しかし、私の周りには、副会長をはじめ、役員の方々など長年、熱い志をもって福祉の仕事をしてこられたベテランの方々がいっぱいいます。また地域には民生委員・児童委員、保護司の方々もおられます。さらに社会福祉施設や保育施設、市町村社協では、コロナ禍でリスクを抱えながら、使命感をもって仕事をしておられる職員の方々がたくさんいらっしゃいます。大変、心強いことです。

私としては、現場に行つて、福祉にかかわる方々の声を直に聞きながら、みなさんが高い使命感をもって社会福祉の仕事を今まで以上にやっていただけのように、条件整備をしたり、背中を押させていただったり、場合によっては先頭に立って、支えていけるよう努力していきたいと思っています。

(聞き手・事務局長 武田知記)

●京都府社会福祉協議会の会長・副会長
(任期:令和3年6月23日～令和5年定時評議員会最終時)

会長 小畑 英明
(新任) 日新電機株式会社 特別顧問

副会長 榎田 匠
(再任) 京都府社会福祉法人経営者協議会 会長

副会長 本郷 俊明
(再任) 京都府民生児童委員協議会 会長

副会長 荻野 隆三
(新任) 京都府市町村社会福祉協議会連合会 会長

副会長 小石 玖三主
(再任) 京都市社会福祉協議会 会長

新常務理事 就任挨拶
中井 敏宏



昨年来のコロナ禍で医療・福祉現場においては大変厳しい状況が続いていますが、私たちの生活にも大きな変化をもたらしました。特に、介護が必要な高齢者や障害者、子どもたち、非正規雇用者に深刻な影響を与えており、さらに地域社会や生活困窮の問題もより顕在化してきました。

このような困った時を支えるのが社会福祉であり、社会福祉協議会の使命でもあります。京都府社会福祉協議会は、これまで様々な分野の関係者・地域住民に支えられ、地域福祉の推進を図ることを目的として活動を展開してきました。私も微力ではありますが、その一員として、「つながりをいかして、尊厳が大切にされる社会へ」というビジョンに沿い、ともに生きる豊かな福祉のまちづくりに向けて、関係の皆様と連携・協力し、役職員とともに全力で取り組んでまいりますので、ご支援、ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

——住友電工に入社され、その後日新電機で長年、企業経営に携わってこられたと思いますが、これまでの経験の中で印象に残っている福祉との接点を教えてください。

社会福祉と関係のあることを多少やってきたと思っているのですが、その一つが障害のある人が働く特例子会社を作ったことです。先行事例としてある会社の特例子会社を見学に行った時のことです。そこで、ひたむきに作業されている知的障害の方々の姿に感動して涙がでそうになりました。その時、障害があっても仕事を通じて社会との接点をつくっていくことが、会社の社会的責任だと強く感じました。

働く人が自分たちで何かを生み出してやりがいい実感できるような場を

特例子会社では、働く人が自分たちで何かを生み出して育てていくような仕事をつくりたいと考えました。そこで、観葉植物を育て、社内の植物をメンテナンスする仕事を始めました。日常に観葉植物があることで他の社員も潤いを感じながら仕事ができます。その潤いは、特例子会社の社員が生み出した価値です。日々、実感することで、自然と理解が深まっていきます。そうすると、会社の雰囲気や多様性を認めていく意識が変わっていきます。